

にゅうす らうんじ

現実の日本経済が元気をなくして久しいと裏腹に、企業を舞台とする小説の世界はさかだ。バブル崩壊後に噴出した大型経済事件を背景に、虚実をとりまて企業の内側をえぐる新題材が相次いでいる。高杉良氏の『呪縛』もその一つ。大手都市銀行の腐敗と再生をテーマに、全三巻の発行部数は四十二万部に達し、公開中の映画化作品も十億円の配給収入を見込むヒット作になっている。

■初の映画化作品になった『金融腐食列島 呪縛』では、脚本も手がけたそうです。

映画化の話が最初きた時、原作が生き残っていない、リアリティーが殺されてしまった、が、全然とんだんです。でも、多分多面性というか、映画化を断る理由を原稿紙に三十枚くらいまとめたんですが、それを読んだ共同製作者の角川書店社に「そこまで言うなら脚本に入ってください」と言われて、逃がられなくていいまい。

■高杉作品には読者が多い。そういう意味では脚本づくりも小説の延長線上にあつたのでは。しゃべり方一つで、人物の性格がつかめます。地の文をたくさん書いてもいいけど、会話の方がかみやすい。だから、小説では会話にかなり神経を使ってきました。シナリオも会話です。シナリオに参加したのは、リアリティーのある会話にしてみたいからと、新しい分野に挑戦したこと、小説の世界を広げようというのか、それはいいと思えます。まったく別の世界なんですね。小説と映画との脚本は準備段階から完成まで七月くらいかかっています。小説を書くときは全部一人で書きますが、映画は共同作業ですから、シナリオライターや監督とぶつかったりもする。例えば若いシナリオライターが、銀行員が机をひっくり返す場面を書くんですけど、僕はそんなことをしません。僕は、ほくほく抑えてはいるんですけど、そういう意味では貴重な経験をさせていたんだが、これは大変なパワーがいることです。やっぱりね、小説をここに書いていく方向にしていると思いたいです。

■新しい分野に挑戦したこと、小説の世界を広げようというのか、それはいいと思えます。まったく別の世界なんですね。小説と映画との脚本は準備段階から完成まで七月くらいかかっています。小説を書くときは全部一人で書きますが、映画は共同作業ですから、シナリオライターや監督とぶつかったりもする。例えば若いシナリオライターが、銀行員が机をひっくり返す場面を書くんですけど、僕はそんなことをしません。僕は、ほくほく抑えてはいるんですけど、そういう意味では貴重な経験をさせていたんだが、これは大変なパワーがいることです。やっぱりね、小説をここに書いていく方向にしていると思いたいです。

語る kataru

たかすき・りょう 一九三九年東京に生まれた。化学関係の専門紙の記者をしていた七五年、病氣療養中に友人の勧めで書いた『虚構の城』でデビュー。八三年から作家活動に専念する。『金融腐食列島』『あゝかたな退任』『大合併』『小説第一勸業銀行』『人事権』など作品多数。九六年三月から九

企業小説に24年「まだまだ関心持ち続ける」

会話のリアルさに神経 虚実皮一枚で経済描く

高杉良の世界



自宅近くの職場へ向かう／撮影・金井三喜雄＝東京都内

■取材も一人で。助手は一切使わないし、編集者が一緒にいきたいというときも、ほとんど断ります。責任でせつかかな性なので。取材相手はほとんどの場合、知識があると思われているかも知れないが、吸い取り紙のように一から何でも聞きます。恥ずかしな人でも思わない。『小説巨大証券』を書く前には「中国フッド」を「ちゅうごくフッド」と思っていて、銀行員の思に笑われたことすらあります。でも、それはほくほくの強みかと思っています。

■『金融腐食列島』は総会屋への利益供与を、『呪縛』は第一勧業、興銀、章の三行統合をそれぞれ予言した評判になりました。このまゝ、映画の試写会でちょっとふざけて、ほくほく予知能力があるんじゃないかなんか言われたことがあったんですが、そんなことはあわてなくていい。

て……。ただ、経済小説を書き始めて四半世紀近くなります。その間に積み上げきたネットワークがありますから、引き出しはたくさんある。どこを押せば、どういことが聞けるというかがわかっています。

■『金融腐食列島』では、実際に事件が起きるなんて思わなかったけど、銀行が痛んでいることはわかっていて、どこか何か起きるかなという予感めいたものはありました。三行統合は、複数の取材からそういう話が聞えてくると、匂いをつかいて書かなくてはいけない。なるほど、なるほど。まさしくの想像力だけで朝日中銀、産業銀行、芙蓉銀行なんて書けません。

■モデル小説には、ノレッシュヤもあるでしょう。

それはあります。いやがらせにピアノ線を送ったこともありますが、首をくねらうんですよ。その経緯は『呪縛』の主人公が受けるいかにせよ、作品の中で使いました。『濁流』という作品では、関係者の抗議に編集サイドが妥協して、連載途中で主要登場人物の名前を変えてしまいました。

ええとありました。けれど、その一件ではむしろ、高杉は取材して書いているというところが読者によくわかってもらえたと思います。

■それだけの取材をしたら、ノンフィクションとして書くこともできるのではありませんか。

『小説日本興業銀行』という作品では、全部実名です。頭取、会長を務めた中山泰平さんが主人公になっていますが、彼が知らないことも書いてある。

た。ある時、中山さんに「九五多事だ。だから小説の二文字はつた方がいい」と言われました。僕は「これは小説です。モデルの口調にたまるまで取材をしていますが、出てくる会話はみんな私が作ったもので」と返事をしました。中山さんは不満そうだったけど、僕は取材をしないとき、会話を頭で浮かぶんです。それがフィクションとノンフィクションの境目かと思っています。

■小説という手法に「逃げ」を感じて読者はどうでしょう。

どうでしょうか。小説の面白さ、ノンフィクションの面白さは違います。読者も小説とノンフィクションは必ず区別していると思う。小説の方がアビリティが強いこともあるし、山崎豊子さんの『沈まぬ太陽』とか高村薫さんの『レイ・ジョーカー』とか、今はどうも小説の方が受けているのではありませんか。

■虚実の皮一枚という、すべて実名で書かれた、二〇〇％は作家の想像力を駆使して書くもので、結構厚さの違いがあります。ほとんど事実ですよというものは、実名で書いている。『青年社長』という小説では、モデルになった社長は実名で書かれるのに非常に抵抗したんですが、読者にリアルな力が強いからと説得しました。『金融腐食列島』では政治家を公的実名にしましたが、政治家は公的実名に存在であり、政治が闇の社会に侵食されていることに対する危機感があって、警鐘を鳴らすにはやはり実名がほしいと判断したからです。

■映画の仕事が一段落してすべし、『金融腐食列島』の続編にとりかかっています。

自分でもあまりに負担を背負う感じがたかすきさんですが、今の金融激動期を書かない手はないと考えました。『金融腐食列島』は一九九七年の早い時期まで終わっていますが、主人公、竹中治夫のその後を描く続編を始めました。経済小説を書く作家にとって、銀行が大きく傾いていった時代を切り取ることは使命というか、そういう立場にあるんだと思っています。

たかすき、九九年の今までの竹中を描いたら、もうの先を書くパワーはなくなっているんじゃないかな。

■でもそのことはまた、現実の小説を通り越して先に進んでいるでしょう。

そうしたらまた好奇心がわき出すかも知れません。たかすき、この分野はこれからもっと書きが出てくると思います。経済小説、フィクションで伝える面白さがありますからね。